

## IAEA 技術国際会議を終えて

高部英明

ここでは表記会議の個人的な印象などをつづりたい。

国際会議のお世話は 86 年の「Beams '86」以来 5 年振り。加藤教授の下、センターのスタッフによる各係（会場、出版、宿泊・・・）が逆算時計で準備し、当日を迎えた。受付開始。早速 C. Rubbia 氏（CERN 研究所長、1984 年ノーベル物理学賞受賞）がフロッピーを手に現れ、“Where is a Machintosh?” 受付に設置しておいたマックを見つけドカッと腰掛けて原稿の出力。日本語のコマンドをものともせず、図を回転させたり、修正したり、早々に出力を終えました。ノーベル賞学者ともなれば、こんなことは秘書まかせと思いきや自分でやる。彼のことについては「ノーベル賞を捕った男」（ガリー・トープス著、朝日新聞刊 19）を読んでいただけに、そのアクティブさの一端を目の前にして再度感心しました。

会議は開会式の後、各国の現状・将来の計画の発表。引続き 5 日間に渡り、レーザー、粒子ビーム、新提案、炉設計の発表が行われた。米国からは、慣性核融合レーザー装置 NOVA（ローチェスター大学）の増力計画が紹介され、注目を集めた。OMEGA では爆縮の均一性向上のため 60 ビートのレーザー装置を計画しており、これにより 1% 以下の不均一に抑えられるとのこと。

ソ連からの参加者は N. Basov 氏（1964 年レーザーの発明によりノーベル物理学賞授賞）を含む 12 名と多かった。昨年ワシントンで開催された IAEA の本会議ですらソ連からの参加者が少なく、発表取り消しが相次いだことも幸いしたのか。これも又 1 つの「ゴルビー効果」であろうか。ソ連からは大型のレーザー装置建設計画が発表された。建設担当の Y. Senatsky 氏がレーザー研見学の後、激光 XII 号実験棟の建屋構造等に質問を集中していたのが印象的であった。

ポスターセッションが火、木の 2 セッション行われた。これに先立ち待ち時間 3 分間で質問無し OHP による発表を行い、自分のポスターの宣伝を行った。どのポスターを聞くかアブストラクトだけではつかみにくく、欠点を補ってか参加者には大好評であった。

会場は万博エキスポランド横のサンパレスホテル。建物が新しくロビーも広々としていて大変雰囲気良く参加者にも好評であった。しかし、レストランなどのバラエティに乏しく、又銀行も遠いことから、参加者に不便をかけた。朝食代わりにドーナッツやコーヒーを用意したりと、宿泊係が気を配っていた。ドーナッツをぱくつきながらの朝の会話も会議を和やかな雰囲気にする一端を担っていたようだ。

午前、午後とセッションが開かれ、加えてインフォーマル・ワークショップを火、木の夜 4 件行った。最近ではゆったり型の、例えば、朝、夜のセッションのみで午後は自由時間といった会議が増え、朝から夜までの集中型は不評をかっている。「夜ぐらいゆっくりさせてくれよ」という参加者も中にはいた。しかし、結果として少々アルコールも入り、自由な雰囲気各人のアイデアの交換が行えてよかったのでは。

慣性核融合が核融合炉となりうるかは、ドライバー（レーザー等）が決定要素です。それにしても会議でドライバー関係の発表に余り質問がでなかったのは残念。ドライバーはシステムが巨大で小回りが効きにくい云々、とはいえもっと新規性のある話題作りに今後期待したいところです。

国際会議は、発表内容もちろんですが、会議が開催されたということ自体にも意義がある。バンケットでコーネル大学 R. Sudan 先生が言った言葉を借りれば「研究者が世界中から集い、情報を交換し、互いに親しく知り合い、親交を暖める。これだけでも会議が開かれる意義が大きいと思うし、それが将来の発展につながっていくのではないか」。私も同感です。